

治療に伴う炎症性変化であると思われた。mass 内における悪性細胞の有無に関する鑑別では、治癒したと思われる mass と悪性度が低い治療前の悪性リンパ腫の間に FDG 集積のオーバーラップが見られた。FDG-PET のより定量的な評価法や分解能の向上が必要である。

9. 静脈血栓症における IVC filter の適応と核医学検査

氏田万寿夫 大脇 和彦 守谷 悦男
関根 広 森 豊 栗栖 康寿
原田 潤太 川上 憲司 (慈恵医大・放)

肺塞栓症の多くは下肢や骨盤の静脈血栓症が原因である。下大静脈内の経皮的なフィルター挿入は、静脈血栓症患者の肺塞栓の発症および再発の予防に用いられている。1987年10月より現在まで、当院にて静脈血栓症9例に IVC filter が挿入された。7例に肺血流シンチで肺塞栓が認められたが、血栓溶解療法にて4例に塞栓の改善が見られ、全例に塞栓の再発は認められなかった。

RI ベノグラフィは、静脈閉塞の状態や血栓の局在、また同時に肺血流分布をも簡便な方法で評価できる点で有用であった。わが国の肺塞栓症の発生頻度は増加傾向にあり、IVC filter および RI ベノグラフィは、今後さらに普及することが予想される。

10. 新しい肝スキャン製剤 ^{99m}Tc -GSA による慢性肝疾患の評価

小須田 茂 塩山 靖和 鈴木 謙三
(都立駒込病院・放)

新しい肝スキャン製剤である ^{99m}Tc -GSA を用いて、肝癌合併例を有する慢性肝疾患患者14例(22検査)に定量的肝機能評価を行った。TAE 施行5例においては TAE 前後に本検査を行った。定量的指標として、HH15(3分後に対する15分後の心臓 H のカウント比 H15/H3)、LHL15(15分後における[心臓 H + 肝臓 L]に対する肝臓 L のカウント比 L/(H+L)) を求めた。

その結果、HH15、LHL15 は各種肝機能検査のうち、ICGR₁₅ と最も良く相関 ($r = -0.849$, $p < 0.0001$) したことから慢性肝疾患の肝機能予備能の新しい指標となると考えられた。TAE 前後では一定の傾向はみられず、LHL15 はほとんど不変であった。副作用は何ら認められなかった。

11. 原発性肺癌における ^{201}Tl SPECT— ^{67}Ga SPECT および CT との対比

遠山 敬司 小泉 潔 内山 暁
(山梨医大・放)
小沢 克良 (同・二内)

原発性肺癌25例に ^{201}Tl SPECT を施行した。原発巣の描出を CT での腫瘍径と比較した。同時期に ^{67}Ga SPECT も施行された15例は、原発巣の描出程度につき、両者を比較した。手術が施行された7例に対し、縦隔リンパ節転移の有無と ^{201}Tl SPECT 像を比較した。

原発巣の小さなものは ^{201}Tl の集積が見られない場合があったが、1.5 cm の小さな腫瘍径でも明確な集積像を呈した症例があった。腺癌では、 ^{201}Tl が ^{67}Ga よりも強い集積を示した症例が多かった。手術で縦隔リンパ節転移が証明された5例中、3例が ^{201}Tl 集積像を示した。 ^{201}Tl SPECT は原発性肺癌に有用であると思われた。

12. 肺胞蛋白症における核医学検査の1例

西山 正吾 石井 勝己 片桐 科子
西巻 博 池田 俊昭 中沢 圭治
依田 一重 (北里大・放)

肺胞蛋白症は希な疾患で、核医学検査の報告も比較的少ない。今回われわれは、肺胞蛋白症における核医学検査を経験し、知見を得たので若干の文献的考察を加え報告する。症例は32歳、男性で、検診にて胸部異常陰影を指摘され、精査目的で本院を受診した。来院時は軽度の咳を認めたほかは無症状であったが、臨床検査上僅かな動脈血酸素濃度および%VCの低下を認めた。開胸肺生検の結果、PAS陽性の肺胞内沈着物が証明され、肺胞蛋白症と診断した。核医学検査は、 ^{67}Ga シンチグラフィ、肺換気および血流シンチグラフィを施行し、肺換気および血流シンチグラフィにて胸部X線写真の異常陰影部にほぼ一致し、換気および血流の低下を認めた。 ^{67}Ga シンチグラフィにおいて異常所見は認めなかった。各所見を供覧し、報告する。